

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名     ガーデナ香子

ガーデナ香子氏の論文「ブラカ・L・エッティンガー研究：マトリクスの遭遇の理論と実践」は、精神分析医、美術家、作家として重要な存在でありながら、これまで日本ではほとんど知られてこなかったエッティンガーについての、世界的にも初めてと言ってよい包括的な研究である。ガーデナ氏は本論文において、エッティンガーの理論と実践の核心を「マトリクスの遭遇」(matrixial encounter)の思想に求め、その理論と実践を通して「新たな倫理性のモデル」が獲得されることを示そうとしている。

ガーデナ氏はまず第一部において、エッティンガーの多彩な活動を「精神分析理論家として」のそれ(第一章)、「フェミニスト美術家として」のそれ(第二章)、「流浪する語り手として」のそれ(第三章)に区別して、順に論じていく。この部分はエッティンガーの思想の主導的モチーフを取り出そうとする部分であり、審査において最も重視された。エッティンガーの活動の中心に、後期ラカンの精神分析理論から練り上げた「マトリクス」(matrix)という「主体性」の構造を見定め、ここからフェミニスト美術家および「流浪する語り手」としての作家活動に一貫して流れる問題意識を解釈していくというガーデナ氏の選択は、いわば「応用篇」としての第二部、第三部の基礎となり、エッティンガーの活動の包括的把握を可能にした適確な選択だとして、審査委員の支持を得た。

他方、「マトリクス」という概念を母体と胎児との共生関係から説明する点について、それを出生後の個人と他者との関係のモデルへと普遍化することがどこまで正当化されるのか、また、「象徴的なもの」をファルスの・父的な原理から説明するラカンに対して「マトリクス」という「女性的」原理を強調するエッティンガーが、その「女性的」なものを「母性」に置き換えているように思われる点に、現代のフェミニズム思想の観点から見て問題はないか、さらに、いずれにせよ父的・ファルスの原理なしに「象徴的なもの」の成立を説明することは困難ではないか、といった問題が指摘された。これに対してガーデナ氏からは、エッティンガーが「マトリクス」に「子宮」や「母胎」のイメージを直接重ねる点には曖昧さがあり、その必然性を論証できるかどうかはたしかに課題として残るが、「マトリクス」概念は、ラカンのファルスの「象徴界」を否定するものでも、それと対立するものでもなく、両者は互いに「入れ込んだ形」で共存するものであり、「マトリクス」はファルスを補填するものであるという説明がなされ、了承された。

第一部第二章と第三章では、精神分析理論から形成された「マトリクス」の概念、「私」と「非-私」との「応答-責任」(responsibility)的な共生関係が、エッティンガーの美術制作および「流浪する語り手」としての作家活動においても、いかに実際に生きられ実践されているかが論じられる。ここではとくに、「ホロコースト第二世代」としてのエッティン

ガーが「共一証言」(with-nessing)を通した「トラウマの再散布」という形で「マトリクス」(あるいは「メトラモーフォシス)を捉え返していることの指摘と、それをナンシー・ヒューストンの小説『天使の記憶』の中に読み取っていることによって、「マトリクスの遭遇」の概念がより深められ、説得力を持たされている点が評価された。

本論文で最も高い評価が集まったのは、第二部、第五章の2で「《エウリディケ》シリーズ」を論じた部分である。第二部でガーデナ氏は、第一部で確認したエッティンガーの基本的モチーフが、彼女の「美術作品と制作言語」においてどのように実現されているかを、エッティンガーの代表的な作品の中に追跡していく。

第四章ではまず、エッティンガーの初期美術作品の中に繰り返し登場する大文字の「オメガ」のモチーフを分析し、それを「マトリクスの境界」であり、「私の終わり」であって、「私はマトリクスの遭遇を通して、非一私の時空間に私が存在していない可能性を認識し、受けいれなければならない」というメッセージだと解釈する。ここにユダヤ神秘主義神学において「神の収縮」を意味するツィムツム (tsimtsum) を重ねる読みはスリリングであり、レヴィナスやデリダといった思想家との比較研究という重要な課題を浮かび上がらせることが指摘された。

第五章では、エッティンガーの独創的な美術制作方法である「フォトコピック」を、「私と非一私という部分主体が互いの間を往復しながらともに少しずつ形を変えてゆく過程」と定義された「メトラモーフォシス」の実践と捉えたうえで、エッティンガーの代表作である「《エウリディケ》シリーズ」を分析する。親戚が現実に犠牲になったウッジの強制収容所の写真をフォトコピックで処理したこの連作を、「痕跡」化した「忘却の記憶」を通して「トラウマの共有と再散布」を試み、ひいては「トラウマの治癒」を「期待する」実践なのだという解釈は刺激的で、高い評価を受けた。

ガーデナ氏は第三部において、マトリクスの遭遇のモデルを「応用」し、フェミニスト美術の歴史において重要な位置を占めたメアリー・ケリーの作品「ポスターパートナム・ドキュメント」と、マルグリット・デュラスの小説『夏の雨』について、従来とは異なる解釈の提示を試みる。前者を、母と息子の「不安定」ではあるが「肯定的」で「創造的」な「共一出現」の表現として、後者を、読者にとってテキストの「未知」なるもの、「理解の不在」が否定的なことではなく、むしろ他者との倫理的なつながりを形成するものであることを示唆する作品として解釈する読みは、一定の説得力を持っていることが認められる。

全体として、叙述にやや繰り返しが点、表現に曖昧な点があることが指摘されたが、難解なエッティンガーの思想を丁寧に解きほぐし、分かりやすい叙述に努めている点は評価された。美術家としてのエッティンガーを理解するのに不可欠な図版で、本文中で言及されるものが必ずしもすべて収められていない点も、改善可能な不備として指摘された。

結論として、本論文は、精神分析、美術、ユダヤ思想、文学など、多分野にかかわるエッティンガーの業績の全体を理解し、そこに一貫した解釈を施すことに成功した優れた研究と評価できる。世界的に見てもまだまとまった研究のないエッティンガーの理論と実践、思想と作品について、初めて包括的に論じた研究であり、いくつかの課題は残したものの、今後わが国においても世界においても、エッティンガー研究の出発点として参照されていくに価する学術的水準に十分達していると判断される。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。